

う尊い作業に携わることができたこと自体、私の生涯にとつて素晴らしいことであると思つた。特に横江君や原隊の戦友たちが「隊長、屍体埋葬の仕事を引き受けた渡辺さんを恨みましたが、こうして加藤戦友達まで立派に埋葬できた今、本当によかつたと思います」という戦友達の話を聞いて涙が出た。

それから毎夜赤々と燃える鎮魂の灯に戦友の冥福を祈りながら、「俺たちはいつの日か生きて日本に帰れるだろうか」と思う日々が続いた。だが、「ダメイ」の話はバツタリ途絶えたまま埋葬作業は八月下旬まで続いた。窪地屍体置場から戦友の遺体を一人残らず正式墓地に埋葬し私どもの任務を達成した時、その埋葬人員は確かに六百人を超えていた。

忘れもしない昭和二十一年八月十五日の朝、赤鬼所長から「渡辺中隊は日本人墓地整備に全員出役せよ」との命令があつた。私は中隊の戦友達を励まして墓地を整備し、墓地の一つ一つに野花を捧げ周囲を清掃していると、所長以下ソ連のスタッフ一同が盛装で揃つてやつてきた。そして野草で作つたソ連式の大きな花

輪を捧げて、ソ連式の鎮魂の儀式でいかめしく祈つてくれた。

それから赤鬼所長は、私ども中隊の前に立つて「渡辺中隊の努力によつて日本人墓地が立派に出来た。皆さんに感謝する」と言い脱帽してわれわれに礼を言ってくれた。私は、その日が日本敗戦後まる一年目であることと、私どもの隊だけこの墓地に集めて戦友の慰霊をしてくれた赤鬼所長に軍人としての友情を感じ、心から感謝した。

それから私どもはみんなで枯れ木を集め最後の訣別だと特に大きな薪火を捧げて、戦友の眠る墓地を後に収容所に入った。収容所から見える墓地にはそれから「鎮魂の灯」は赤々と燃え続けていた。

## 異国の丘シベリア抑留

長野県 高嶋 利春

昭和十八年七月二十六日、徴兵検査。

十九年一月八日、二十年間生まれ育った地の村人に送られ、意気揚々と高崎第三十八部隊に一月十日入隊。この伊那谷より二百人くらいの新兵が行く。私は機関銃中隊に配属され、北支軍であることを知る。静岡出身の山本軍曹が迎えに来ていた。

それから約二週間後、一月二十四日と思うが、高崎の駅から夜出発し、汽車は一路博多港に向かう。その夜は博多は雨降り、外地からの除隊の兵との行き違いで、それは何とも言えない思いであった。やがて乗船、釜山に向かう。翌朝着き、列車で奉天から天津に。天津に一泊、天津の夜は雪降り、非常に寒い。朝食をとり、今度はトラックで我が教育隊に向かう。いよいよ戦地。五人に一丁の小銃を渡され、物々しい雰囲気であるが無事に着く。三月末には教育が終わり、四月末に河南作戦に参加するため豊台に集結。五月八日、菊兵团の指揮下に入る。京漢作戦、洛陽に向かう。五月十九日総攻撃、二十一日洛陽城攻略。また河北雄県に位置し討伐作戦の毎日であった。

その後、命により二十年五月三十日、米ソ戦に対応

するため満州に移動、駐六十三師団の指揮下に入る。すぐに承德作戦に参加。八月十五日、満州錦県に集結。八月十六日、奉天二〇一貨物廠に移動。同地にて武装解除を受ける。

二、三日過ぎて貨物廠より移動。そのときに、食糧、衣服等出来るだけ多く持つよう指示あり。北陵大 학교に移動。この大学校に二週間くらい。九月七日、奉天よりソ連軍の捕虜としてシベリアに連行され、バイカル湖西方チェレンホーボ第一收容所へ。この間種々とデマが。ウラジオオから帰国とかいろいろと騙されて、貨車の二段ベッドで家畜同様の輸送であった。長い長い旅路だった。その間、食糧は持っていたがなかなか食事を作ることはできなかった。貨車に乗り込んだとき、日本に帰るんだから少しの辛抱と思いに、何日か走ってバイカル湖に出たときはまさしくウラジオオの海だと思つて、皆の喜びは大変なものだったが、また山の中に走って行った。バイカル湖であることを知った。考えてみると、貨車の後方より日の出が見え、日本への帰国は全く絶望的であることを知り、

だれ一人口をきく者もなく、私もその一人であった。

道中、雨の降る日もあり、九月の初旬というのに雪まじり、寒さが身にしみる。現地の住民も、長い戦争のためか靴下をはいている人は全く見ない。そんな状況の約二週間だったと思うが、真夜中に我々の貨車がとまった所は炭坑のご真ん中。そのとき、いよいよ来る所まで来たんだと観念せざるを得なかった。全く夢にも思わぬ所であった。

午前九時頃「下車」と指示があり、見ると、小高い丘の上二キロメートルくらい向こうに収容所と思われる、高い柱に鉄線を張り、四隅に銃を持つ四人の兵士が見える。まさしくラーゲルである。やがて、千五百人の我々仲間は収容所前に整列、待つこと三時間余。見れば見るほどやはり捕虜収容所。二重の柵、外は高圧線である。中に入る、持ち物は全部その場に置いて入るようにとのこと。入ると同時に門の扉が閉まる。待つていたかのように大型のトラックが来て全部没収。なんともやりきれない思いであった。夜になって毛布一人一枚と飯盒が渡され、深刻な捕虜生活が始

まった。

一夜が明けて翌日また千五百人、我が仲間が入って来た。収容所は大混乱となる。三千人も収容した。水道の設備がないところで炊事を始めた。宿舎は二百五十人収容の棟が二十五棟あった。水は三キロくらい離れた所から運んで大変なことである。

最終的にはさらに千五百人、計四千五百人の人員になった。人間の住める状況ではない。そんな中をだんだんと整備した。便所も冬に備えて収容所内に二カ所、簡単な素掘りで、深さが五メートル、長さ十メートルくらい掘って作り、大変な作業であった。

その間に身体検査が始まり、これによって作業の内容が決まる。一級、二級、三級、OK（オカ）と四段階。一級、二級は主に炭坑、三級は四時間作業、OKは作業なし。こんな等級でいよいよ十月末より作業を開始。しかし、ぼつぼつ寒さも増し、十一月ともなると零下十度。日増しに加わる寒さと、食糧も粟、エンバク、高粱といった物で、これも腹三分。とても作業のできる状態ではない。

十一月も過ぎ十二月半ば頃になると病人が続出。水がないので顔すら洗うことができず、ましてや風呂もない。シラミによる発疹チブス、また赤痢の患者。シラミの媒介により二百五十人兵舎にチブス患者が二、三人出ると、一夜にして十人、二十人となり、半数くらい患者が四、五日で出るといった具合だが、薬がないのでどうすることもできない。私は幸い赤痢であつたので、毎日木炭を薬にして食べて一カ月くらい苦しみ生死をさまよつて、二カ月くらいで正常になつた。しかしチブス患者は毎日数を増し、二月中旬頃よりばたばたと死亡。兵舎のどの棟もすきすきになるくらい、その有様はまさに生き地獄と言うか、一緒に寝ていた戦友が朝起きてみると死んでいることも珍しくない。後で考えると、何か肉親に伝えたいこともあつただらうと、余りにもやりきれない思いである。

私も下痢がとまり調子がよくなり、自分でもやつとので希望が持てるようになった。二月中旬、若干暖かくもなり、班に帰り身体検査の結果、三級。しばらくの間軽作業、四時間の作業場に行く。たまたま

夜、戦友の埋葬に出る。割当てがあり三人出て行く。屍室の前に行くとき馬そりに三頭の馬がいた。するとロシアの兵士が、十五体をこの「そり」に積むようにと指示。室に入るとびっくり、戦友の屍が何百体とも知れぬ、いっぱい積み重なっており、体には何も着ておらず真つ裸。「ふんどし」一つ着けていない。余りの姿に驚き入つた。瞬間、後ろに戻つた。大きい室に何重にも積み重なつた屍の山、戦争中の大きな作戦でもこのような所は見たことがなかった。見れば見るほど哀れと言うか、言葉にならない。仕方なく一台の「そり」に十五体を横積みにして、三、四キロくらい向こうの丘の上に運んだ。まだまだ寒く土で埋めることはできないので雪で埋めて、ソ連の監視兵の「ヴィストラ、ダワイ、ダワイ（早く早く）」の声に涙して帰つた。その後も二回くらい行つたが相変わらず屍室はいっぱいで、まだまだ相当な人が死んでいるようであつた。

一時、寒さと病人で作業も室内作業を除いて中止となり、二月末再開された。三月になつて浴場ができ、

やつのことでシラミの発生も防ぎ、衣服の消毒も一週間に一度くらいできるようになった。作業は炭坑が主だが、レンガ作り、建築、ガラス工場等々もあり、春から夏はコルホーズ作業。春になって、やっと我が収容所に水道敷設工事が始まった。これは自分たちの施設だからと、一日の作業が終わってから二、三時間余分に強制され、三メートル余の穴掘りだ。大変な作業で、完成までに四カ月くらいかかった。

身体検査は月一回、その結果で作業場が決められた。仕事の量「ノルマ」は、一番きついのは炭坑での石炭の貨車積みであった。毎日の現場の状況にもよるが、二十人から二十五人で一日のノルマ七十〜八十トンだ。実際最初は六〇%くらいがやっとで、一〇〇%は容易なことではなく、作業が終わって帰るときに現場の監督と交渉をして仕事の出来高を決めることも度々であった。

仕事の出来高による食糧の差は、余りにも常の量が少ないためにできず、これ以上減ずると作業に出ないということもあった。黒パン二百グラムにスープが飯

盒の中蓋に一杯が常であった。健康の管理など考えることより、いかに一時的に空腹を満たすかで毎日を暮らした。春になると作業の行き帰りにヨモギ、アカザなど、野原の雑草で口に入る物は何でも取って来てラーゲルで茹でて食べる。アカザなどは非常にアクが強いため、水でよくアク抜きをしてからでないと病気になる、命をなくす人もいた。また春のコルホーズ作業。馬鈴薯の種播きに行き、種イモを生で食べて胃の中で醗酵してガスがたまり亡くなった人が、私の知っている中で四、五人はいる。このように空腹に耐えきれずに命をなくすような出来事も数多く、すべてをここには表せない。シベリアの現地の人ですら食糧が不足しているのに、我々抑留者を六十万人も送り込んだのだから当然のことである。

寒さと飢えの環境は経験のないことで、夢にも思わぬことである。毎日毎日、自分の体力の衰えがわかるので、できるだけ動かずに身が保たれるように心掛けて毎日を送っていた。衣服等も、だんだん死んだ戦友の着たものを着るといふことで賄っていた。

毎日の作業が終わりラーゲルに帰る。夕食が終わると週に二回、民主化運動の講義があるが、我がラーゲルは出席するだけで特別の問題はなかった。毎日敵寒と飢えに耐えながら、その日が終わると床の中で、今日一日を送ることができたとはっとし、故郷の肉親へ思いをめぐらせ、明日への希望を「東京ダモイ」と自分なりに聞かせる毎日であった。私は三年間同じ収容所であったので、その点は恵まれていた。

昭和二十三年二月に、各作業場の引率者は将校または下士官であったのが、一般からの推薦により決めて、私もその一人になった。

四月二十二日の二番作業、午後四時からウチャヤスクで作業中、午後六時ころだと思うが、ソ連の兵士に私は収容所に帰るようにと言われ、私は一瞬、ダモイあるいは収容所の移動かなと様々な想定をしながら収容所に帰り本部に行くと、約五十人の仲間がおった。帰るとは言わないが、ほぼ間違いなさそうである。三年間生死を共にした戦友と別れることになる、何となく別れが惜しい。何人かにあいさつをして身の回りを

片付けて、その夜十時頃、チェレンホーボの思い出深い収容所を後にした。その不安と希望は、本人でなければわからない思いであった。

三日目あたり、どこかわからない町らしき所に着いたが、ナホトカに近いというニュースが入った。ほっとしたが、また翌日より作業が始まる。船の貨物の積み下ろし、毎日毎日がその繰り返し、大変な重労働である。やがて六月が終わり七月二十八日、三カ月のナホトカでの労働が終わり、今度は間違いなく日本に帰れるということを手続き等で知った。午後三時乗船、港に行くとき船に日の丸の旗、夢にまで見たこの日、そんなことを思いながら船に飛び乗る。

七月三十一日、舞鶴港に無事帰還ができた。船の中では特別な問題もなく平穏であった。しかし我が家へ戻ると、農家といえども食糧等も十分でなく、割当て出荷で米も余分な物は何もなく、今度は自分で自分の生活の道を考えなくてはならなかった。仕事もすぐ見つからず、暑さに負けたが、九月になってやっと涼しくなったころ仕事にも身が入るようになった。昭和二

十五年に酪農に夢を持ち、始めたが、今は乳牛も二百頭の規模になり、やっと長い旅路も七十五歳を迎えることができた。

## シベリア抑留記

岐阜県 坂井文介

### 拉古收容所へ集結

密林山岳に立てこもっていた日本軍將兵は、軍司令部の命令の呼びかけにより、朝までにあちらこちらから横道河子の広場に集まってくる。いずれも哀れな姿である。敗戦の惨めさを目の当たりに見ると我慢がしきれない。敵陣に切り込んで暴れたい気持ちである。一度、山岳に難を避けて機をうかがっていた將兵が、あきらめて山を降りて来る。私たちはまる一昼夜食事にありつけなかったが、ようやく乾パンが渡されこれをお茶もなしに喰えをしのぐだけの給食であ

る。私は、北支の戦地で塩のないつらさをつくづく味わっていたので、家を出るとき塩を軍足に入れて、これを携帯していた。これを少しずつなめた。野原に集結してくる日本軍が日に日に増えてくる。三百人くらいの一集団を作り、やがてもと来た牡丹江への道を引き返せというソ連側の命令である。

もうこの頃からは日本軍の將官、佐官クラスはどこかに姿を消していた。尉官、下士官兵といった集団で、この頃はまだ階級章は守られ、我々は第五軍司令部福島大尉が集団の長となっていた。

無防備、身軽な装具である雑のうと飯盒という生きるのみの携帯品を身につけての行軍が始まったのである。自動車も軍馬もソ連軍に徴発してしまった。ただし給与関係の一部の者には馬と荷車を使用することを許された。横道河子の数日は夢のように過ぎた。

いよいよソ連行きの捕虜行である。煮えくり返るような悔しさの毎日が続く。牡丹江への道を再び引き返して行く。数日前車で走った道であるが、もはや初秋の草花が美しく咲いているのを見ることができた。